

教導職期における神社の活動——大宮氷川神社と周辺神社の活動を中心に——

徳永 暁

はじめに

本稿では、教導職が活動していた時期（一八七二（明治五）年—一八八四（明治一七）年）における神社の活動実態を明らかにすることを目的とする。明治初期より始められる神道国教化の動きの中で設けられた教導職期における神社の活動は、各地域で行われた「三条の教則」（敬神愛国・天理人道・皇上奉戴）に基づく説教活動や、教化活動の一環として行われた各神社での教会講社の結成などが挙げられる。特に教会講社の結成は、それぞれの神社の信者組織を作ること¹にあり、教化活動には神社にとって信者の基盤形成や神社の勢力拡大が一つの目的としてあったことが評価されている。ただし、組織の結成や拡大のより具体的な過程や、主体となる人物達（教導職）の活動が不明確であることは否めない。加えて、それらの活動を見た場合、大社（出雲・伊勢）などの活動に限定されてお^り、大社以下の神社を含む重層的な活動実態の検討が課題として残されている。

このような教導職期における神社の活動に対する評価がある一方、一八七一（明治四）年以降、神社は「国家ノ宗祀」とされながらも、明治初年の世襲制廃止や社寺領上知などに始まるその後の神社政策によって、宗教活動や経

済面において制限が加えられ、国家による神社の保護が十分ではなかったという、国家による神社保護の希薄性が指摘されている。⁽²⁾

これら双方の神社に対する評価を並べた時、国家の保護が不充分であつた神社が、どの様に神社を存続させ、国民教化活動に力を注いだのかという疑問が浮上する。よつて、神社政策による制限下での活動実態の分析が必要であると考ええる。

また、神社の成立や存続は元来、「神社は神を祀る「場」である。そして、神社における神祭は、ある個人の行為のみでは成立せず、複数の人間の行為によつて初めて成立する。(中略)その行為の最も基本的なことは、神社に実際に詣でて(参つて)、祭り・儀礼を行うこと、参拝をすること」にあるとされ、神社への参拝者・参詣者の存在が重視されている。⁽³⁾このことは、神社への信仰という点で注目すべきものであり、特に、先述した様な神社の活動が制限される状況下においては、各神社でも重要視されたのではないかと考えられる。そこで本稿では、教導職期の神社の活動を追うなかで、神社への信仰という問題を分析対象軸の一つに加えたい。

対象とする神社は、埼玉県大宮氷川神社と周辺に在する神社とし、教導職期における活動を通じて、大社と郷村社との関係性を明らかにすると共に、教導職期の神社の活動の意味を考えていきたい。

一 大宮氷川神社信仰の概要

大宮氷川神社を中心とした教導職期の活動を見る前に、本節ではまず、近世と近代以降の大宮氷川神社への信仰の状況について触れておきたい。

【表①】武蔵国における氷川神社の郡別分布数

郡名	分布数	郡名	分布数
豊島郡	12	比企郡	28
葛飾郡	2	横見郡	8
多摩郡	17	埼玉郡	8
荏原郡	7	大里郡	2
新座郡	14	男衾郡	2
足立郡	142	幡羅郡	1
入間郡	37	計	281
高麗郡	1		

「大宮市史」第三巻中より転載

近世期の大宮氷川神社は、武蔵国一宮の社格を有し、幕府より三〇〇石の社領を受ける。また、岩井家（男体宮、祭神…素戔鳴尊）、西角井（鏡王子宮、祭神…大己貴）、東角井（女体宮、祭神…奇稻田姫命）の三家による年番神主制と別当観音寺による運営がなされていた。

（二）近世期における大宮氷川神社への信仰

近世期の大宮氷川神社においては、「氷川講」という大宮氷川神社を参詣する事を目的とした、五穀豊穡・雨乞・照乞などの祈願をして、太々神楽を奉納する講が設けられていた。「氷川講」の分布は荒川水系を中心に分布していたとされ、武蔵国一帯に村の鎮守・産土神として点在していた「氷川社」を信仰圏の基盤としていた（表①参照）。講の組織化については、伊勢神宮などのような「御師」の働きかけによる結成ではなく、大宮氷川神社の神主家や社人によって、勧化・組織化されたものであった。そして、「氷川講」の成立として、その初期には氷川社が祀られている地域において、その氏神、あるいは産土神としての氷川社の信仰を中核に講がつくられていて、その集団から総鎮守である大宮氷川神社に参詣が行われるようになった。⁽⁶⁾として、武蔵国一帯に、地縁的な広がりを持つ信仰圏が存在していたことが述べられている。その他にも、大宮氷川神社の信仰は「東照宮様厚ク御由緒有之御朱印被下、当国最初之御祈願所、御在国第一ノ御宮ニ而、御府内始國中氏子なれば、日々再拝各第一ニ尊験可致御宮、よつ

て近来別而年増太々講御加入数多出来参詣群衆之社頭磐栄⁷⁾」と、家康の信仰も受け武蔵国一宮であるという由緒を以て、氷川神社信仰の繁栄を築いてきたことが分かる。

(二) 明治初年における氷川神社への信仰⁸⁾

明治に入ると、一八六七（明治元）年に大宮氷川神社への天皇行幸に伴って、大宮氷川神社は勅祭社となり、近世期には同格であった三社（男体宮・女体宮・簸王子宮）の内、男体宮のみが本社、他二社は摂社となる（主祭神は素戔鳴尊のみとなる）。また、一八七二（明治四）年には神主の世襲制が廃止され、神主に代わる役職の大宮司に精選補任された交野時万^{かたのときち}が就任し、祢宜職には旧神主家の東角井・西角井家が就任することになる。また、同年には社格制度の導入により、大宮氷川神社は伊勢神宮に次ぐ官幣大社に列することになる。

そのような状況下における大宮氷川神社への信仰とは、どのようなものであったのかを次の史料より見てみたい。

【史料一】⁹⁾

（筆者註―明治四年三月）十五日

永代太々講中当年ハ至て少ニて去年よりも集金も少々ナリ

【史料二】¹⁰⁾

（筆者註―明治五年六月）十五日

御宮勤今朝出勤一同無之、但祭礼（報告者註・橋上祭）ニ付追々門人等参候得共、其外一切不参、門人も五六

人ナリ 当年ハ小麦之初穂当家へ一向ニ持参無之候間、客人も一切参不申 尤官邸へ信心之者少々ツ、

【史料三】¹⁾

(筆者註—明治六年三月) 十五日

永代太々御神楽(報告者註・太々神楽祭) 神楽殿ニテ執行(中略) 当日太々講中一向に参り不申凡ソ 廿四五
人参り

【史料一】から【史料三】は、大宮氷川神社の旧神主家の東角井家が残した、「年中諸用日記」(以下「日記」と略す)である。いずれも、大宮氷川神社で行われていた大祭とされる橋上祭や太々神楽祭が行われていた時期の記事であり、大祭として設けられていた祭礼に、地域の人々が集まっていない状況を示している。このことは、神主の世襲制の廃止と、それに替わる精選補任による大宮司の着任という新たな神社内部の変動により、近世期まで行われていた旧来の神主家による祭礼の統括・執行権が失われたことが一つの要因としてあったと考えられる。¹²⁾明治初期においては、大宮氷川神社への信仰が、衰退傾向にあったことが確認できる。

二 明治初年の神社政策と大宮氷川神社による周辺神社との運営策

(一) 明治初年の神社制度

本節では、明治初年の神社政策による大宮氷川神社とそれ以下郷村社のおかれていた状況と、その政策に対する

大宮氷川神社と周辺神社による運営策について見ていくこととする。神社の主な諸経費には神社の営繕費、祭典費、神職の給与が挙げられ、それらに関わる明治初年の諸制度について確認したい。

・官社以下諸社の営繕

【史料四】¹³

官社以下定額及神官職員規則

（前略）

一、官幣社式年ノ造営年分ノ営繕祭典公事ノ入費等一切大蔵省下行タルベシ

一、国幣社祈年ノ幣帛官祭ノ仕度等凡テ公事ノ入費ヨリ出ベシ

一、同上式年ノ造営年分ノ営繕等ハ公廩入費之外タルベシ、尤地方ノ見込ニ任セ或者従来ノ処分ニ任スモアルベシ

一、官国幣社ノ外社領公収ノ諸社営繕社用ノ入費等適宜ノ所置取調ノ上伺出可シ

（後略）

【史料五】¹⁴

国幣社及府県郷社造営修繕官費ヲ廃ス

官国幣社規則辛皮五月十四日相達置候処、国幣社造営修繕ノ儀ハ自今一切官費ニハ難相立候条此旨更ニ相達候事

但府県郷社モ可為同様事

まず、神社の経済面に關する布告は、【史料四】にあげた一八七一（明治四）年五月十四の「官社以下定額及神官職員規則」によつて定められるが、祭典・營繕費については官幣社は「大藏省下行」と国費によつて賄われ、国幣社以下府県郷村社については、各県の地方費によつて賄われる事が定められる。しかし、二年後の【史料五】一八七三（明治六）年五月十五日の太政官布告により、国幣社以下府県郷村社の地方費支給は廢止される。¹⁵次に神職の給与について見てみたい。

・神職の給与

【史料六】¹⁶

官社以下神官給祿制定

官社以下府県社郷社ニ至迄神官給祿ノ定額別紙ノ通り相定メ、郷村社ノ儀ハ官幣国幣府県社ト違ヒ民費ヲ以テ課出

【史料七】¹⁷

郷村社祠官祠掌給料民費課出ヲ廢ス

壬申第五十八号布告ノ通、各地方郷村社祠官祠掌給料ノ儀ハ、是迄民費課出ノ規則ニ候処、自今相廢止シ候条、人民ノ信仰ニ任セ適宜給与為致可申此段相達候事

【史料八】¹⁸

府県社神官ノ月給ヲ廃ス

府県社神官ノ月給ヲ廃止シ、自今郷村社同様人民ノ信仰ノ帰依ニ任セ給与可為致、此旨布告候事

神職の給与については、【史料六】一八七二（明治五）年二月の「官社以下神官給禄制定」によって、官社以下府県社神職については、国費によって賄われ、郷村社の神職である祠官・祠掌については民費によって賄われる事が定められる。しかし、【史料七】で挙げた様に翌年二月には郷村社祠官・祠掌の給与について民費支給が廃止され、加えて、府県社神職についても同様に【史料八】同年七月には廃止される。傍線部に示したとおり、以後府県郷村社の給与は「人民ノ信仰」とあるに、神社への祈祷料や初穂料の如何によって給与が定められることになる。以上のことから、大宮氷川神社のような官幣社以外の神社は営繕費・神職の給与ともに、「人民ノ信仰」如何で左右される状況下にあったことが確認できる。つまり、信仰如何で神社自体の存在が問題となる状況下でもあったと考えられる。以上の様な政策が出された後に、大宮氷川神社と周辺神社の神職らによって、神社の運営策についての取り決めがもたれることになる。

【史料九】¹⁹

神官掌心得書

一、郷社祭日等区内之祠掌一同奉務之事

但、交代毎日一人宛郷社へ相詰神務可取扱事

一、神事式之儀、総而官幣神社ニ相倣ヒ一定神務可致事

一、村社並氏神社祭日ヲ除ク之外、月次神務ハ一ヶ月上旬之中一度事務可致事

但、平社ハ同社より遙拝すべし、祭日者此限ニあらず

一、札守玉串等製造之事

但、郷社ハ勿論村社平社共、札守玉串虫封等之社印板木共一切祠官之進退たるへき事

附、祠掌ニ而札守製造有之上者祠官検査シ社印ヲ押スヘキ事

一、守札紙ハ一般程村紙を可相用事

一、靈位墓誌認方当人在官中死亡ニ候ハ、官可相認事

但、位階有之候ハ、本文同断

一、仏葬跡祓之儀、氏子より申出候ハ、賢木之枝へ垂ヲ付、渡すへき事

但、参務懇願候共忌憚るへき事

一、各区郷社村並平社共氏子有之社之宮繕筋、奉納物者置而不論、其他四時之初穗、臨時守札或ハ祈禱等之社入ニ属スル物ハ、諸入費ヲ通減シ、残高金分之壹割ヲ以テ其区内神社常備トシテ郷社社務所へ積置、残九分ハ祠官掌並出仕共月給等差之振合ヲ以分配可致事

一、諸廻達ハ総而数通分認メ、郵便ヲ以テ各区祠官へ通達之事

但、入費ハ神入ヨリ算計祠官祠掌ヨリ取扱可差出

五里以上往復一泊之分

但、日当廿五銭

一、七十五銭

祠官出在

〃

但、日当廿銭

一、六十五銭

祠官並三等出仕出在

日歸り之分

一、等差ニ寄り日当ヲ賜ル

右、祠官祠掌公務ニ掛り、本県又ハ仲間寄合等ニ而社務出在等ハ、祠官祠掌割合出納可致事

右者仲間一統評議之上決定候也

明治六年五月十四日

仲田寛 網野長雄 青柳恒 藤岡□^(出仕)右衛門 岡村覚太郎

武笠幸美 武笠幸息 西角井正一

【史料九】の「神官掌心得書」は【史料七】の郷村社祠官・祠掌の給与廃止から三ヶ月に結ばれており、その取り決め内容が注目される。まず一つ目は、郷村社の神事等の神務といった、神社運営を各地域の祠掌らによって運営すること。次に、各神社の祭礼日以外にも毎月上旬には月次として神務を行うこと。そして、最も注目されるのが郷村社の営繕費や給与配分についてである。収入源は神社への初穂料や祈禱料、守札などを主として、収入の一割を神社の備蓄費として、残りの九割を祠官・祠掌の給与として設けている。ここには、「人民ノ信仰」や「人民ノ帰依」によって、神社の運営が左右されることとなった郷村社の維持運営対策が設けられているのである。そして、その取り決めを行った人物たちにも注目でき、郷村社の祠官・祠掌たちのほか「武笠幸息」や「西角井正一」

といった、大宮氷川神社の神官達が加わっていることである。⁽²⁰⁾ 取り決めの最後の文に「仲間一統」とあるように、官幣社の神官からそれ以下の郷村社・祠官・祠掌達が協同して、神社の運営策を考えた結果として、この取り決め結ばれたと考えられる。

前節と本節では、教導職活動に入る以前の大宮氷川神社とそれ以下の府県郷村社の置かれていた状況について確認してみた。大宮氷川神社では、明治初年の神社内部の組織変化により、祭礼への参加者・参詣者への減少が見られ、一方の郷村社においても明治初年の神社制度により、「人民ノ信仰」如何で神社自体の存在が左右される状況にあった。大宮氷川神社は一八七一年（明治四）年以降、官幣大社となるため、営繕費・祭礼費等の神社入費については一切国費で賄われるようになるため、郷村社に比べて神社自体の存続が危ぶまれる訳ではない。であるにもかかわらず【史料九】のような取り決めに参加しているということは、神社の存在が地域の信仰によって守られるべきものであることを、自覚・意識しているあらわれではなからうか。官幣社や郷村社など待遇は違っても、同じ神社人としてまさしく「仲間一統」として連携して神社運営を図っていくとする意識が読み取れる。

このような、大宮氷川神社から各地域の郷村社との連関した動きや、神社への信仰の意識は、次節に見る教導職期における教化活動の中でも同様に見られることになる。

三 大宮氷川神社における講を介した教化活動

一八七二年（明治五）年以降、教導職による「三条の教則」（敬神愛国・天理人道・皇上奉戴）を普及するための教化活動が行われていく中で、大宮氷川神社内部の組織に再度変化が生じる。一八七三年（明治六）年三月四日、

【表②】 大宮氷川神社における説教活動（「年中諸用日記」（「大宮市史 資料編」三）より作成）

年	月日	説教場所	参加者	備考
1872 年 (明治 5)	5月 21 日～23 日	大宮氷川神社	大成村、其外から 40 人ほど集まる	
	8月 15 日～17 日	官邸（大宮氷川神社）	近村の者、集まる	
	9月 16 日	昼：大宮氷川神社 夜：大宮宿清水屋	昼：参加者一向に集まらず 夜：余程集まる	
	10月	夜：大宮氷川神社		
	10月 15 日	大宮氷川神社	一向に集まらず	
	10月 17 日	昼：大宮氷川神社 夜：大宮氷川神社	昼：参加者無し 夜：4・50 人程参加	
	10月 25 日～27 日	岩槻町	岩槻町	
	11月 15 日～17 日	大宮氷川神社	天気悪きゆえか、28 人参加予定の所、 15 人のみ参加	
	12月 15 日～17 日	大宮氷川神社	参加者集まらず	
1873 年 (明治 6)	2月 15 日～18 日	15 日：大宮氷川神社 16 日：大宮氷川神社	15 日：大成村 6・70 人参加 16 日：20 人参加	大成村内田孝右衛門より説教依頼
	3月 14 日～17 日			大成村孝右衛門より説教講の話あり
	3月 16 日			説教講の件につき、大成村孝右衛門より金 50 疋
	3月 19 日			大成村孝右衛門参り話す当家にて頓置候説教講之事につき
	4月 15 日	大宮氷川神社		
	5月 17 日	大宮氷川神社	大成村孝右衛門、説教講 50 人参加	
	5月 10 日	御蔵村	御蔵村	
	5月 17 日	大宮氷川神社	大成村の説教講 50 人参加	
	5月 18 日			大成村：孝右衛門・治兵衛参り説教講の件、期日取極について話し合い
	7月 17 日	大宮氷川神社（定例日）		
	9月 15 日	大宮氷川神社		
	10月 5 日	夜：大宮氷川神社		
	10月 17 日	大宮氷川神社		
	11月 10 日	夜：大宮氷川神社		
	11月 14 日	夜：大宮氷川神社		
	12月 28 日			宮前村□□福正参り、自ら作成した説教講録の見分願い
1874 年 (明治 7)	2月 9 日	大宮氷川神社	不二講倡者	
	3月 9 日	伊弉村	伊弉村	
	3月 21 日			大成村孝右衛門、説教の依頼につき期日取り決め
	4月 5 日			中教院（大宮氷川神社）において毎月 16 日に説教の話、県内の祠掌一同集會・稽古
	4月 10 日	中教院（大宮氷川神社）		
	4月 14 日	中教院（大宮氷川神社）		
	4月 16 日			中教院にて祠官・祠掌集會（説教の件）
	4月 17 日			中教院にて祠官・祠掌集會（説教の件）
	4月 27 日	埼玉県		
	5月 18 日	中教院（大宮氷川神社）	御蔵山講中が「しせい」（修成講）と称え惣之内村外 14・15ヶ村から参拜	
	6月 1 日	柏原宿		
	6月 6 日	砂村		
	6月 17 日	中教院（大宮氷川神社）		
	7月 19 日	中教院（大宮氷川神社）	〔 〕講社の者、大勢参詣に参る。商人も余程集まる。	
	8月 28 日	中教院（大宮氷川神社）		
	9月 1 日	中教院（大宮氷川神社）		
	9月 8 日	中教院（大宮氷川神社）	5 日程前から、中教院にて地方の者共を集めて説教につき集會、大勢、賑々しい	
	9月 15 日	中教院（大宮氷川神社）		
	9月 16 日			砂村より説教の依頼
	9月 17 日	中教院（大宮氷川神社）		
	9月 30 日	中教院（大宮氷川神社）	御蔵中大勢参加	
	10月 24 日	丸ヶ崎村	丸ヶ崎村	
	11月 11 日	丸ヶ崎村	丸ヶ崎村	
	11月 21 日	丸ヶ崎村	丸ヶ崎村	
1875 年 (明治 8)	3月 21 日	釣上村	釣上村	
1881 年 (明治 14)	11月 1 日	大崎村	大崎村	
	11月 25 日	大澤村	大澤村	

教導職権大教正平山省齋⁽²⁾が大宮司に着任、同年穂積耕雲が小宮司に着任、一八七四（明治七）年一月五日、東宮千別⁽²⁾が権祢宜⁽²⁾が着任したことである。

また、同年六月三日には大教院の下部組織で教導職の地方統括局である中教院が大宮氷川神社内に設置されることになり、大宮氷川神社は埼玉県内の教導職を養成する機関となる。

前記の人物達の着任と中教院設置に伴って、大宮氷川神社でも説教活動や教会講社などの講を回路とした国民教化活動が展開していくことになる。

（一）大宮神社における説教活動

【表②】は、東角井家の「日記」にみられる大宮氷川神社の説教活動に示したものである。表を見ると、教化活動が開始された一八七二（明治五）年から翌年頃までは、毎月一日から一七日までを定日として大宮氷川神社において説教活動が行われていたことが分かる。参加している村々も大宮氷川神社の隣村の大成村からの参加が目立ち、それ以外の村々については特に参加は見られない。また、一八七四（明治七）年以降になると、説教は定日⁽²⁾を設けずに行われており、参加形態も村としての参加から、村で結成される講を単位とした参加形態へと変化している。加えて一八七五（明治八）年以降になると、大宮氷川神社での説教活動は極端な減少をみる。右はあくまで東角井家の「日記」のみから分かることであり、これをもって大宮氷川神社で行われた説教の参加状況の全てであるとは言えないが、少なからず大宮氷川神社での説教活動に対しては開始当初に比べると減少傾向にあり、参加者についても開始当初から盛況ではなかったことが指摘できる。では、こうした説教活動減少の要因として何が考えられるのかを次で見えていく。

【表③】 教派神道系講社の大宮氷川神社参詣記録（「年中諸用日記」（「大宮市史 資料編」三）より作成）

年	月日	教会	参詣村	参詣人数	世話人	備考
1874 年 (明治 7)	2月 11日	親教	吐普加美講侶者が東角井家の座敷に逗留			
	5月 18日	修成	堀之内村外 14・15ヶ村	14・5ヶ村		
1875 年 (明治 8)	1月 8日					神楽殿拝見所を親講参拝者専用の集会所に定める
	4月 17日		水波田村慈眼寺観音寺南無阿弥陀仏講	200人		
	6月 2日	親教	所々村々	70人		
	7月 14日	親教	新座郡の親講、他 4 組参拝	6・70人		
	7月 15日					
	7月 21日	親教	亘瀬在台 3ヶ村、親親講中	80人	台治定(内台村祠堂)	
	9月 30日	親教	調戸村の親講	100人	矢作清一	
	11月 11日	親教	柏瀬近辺 3・4ヶ村	3・4ヶ村 10人	石門	
1876 年 (明治 9 年)	11月 15日	親教	新井田新田村	4・50人	台治定(内台村祠堂)	
	3月 14日					親事教会の旗を東角井家門前に寄せて追送
	3月 18日	親教	鹿室村 48 人、土呂村 30 人、釣上村・世久保村 56 人、真福寺村 26 人	計 160人	丹後	
	3月 23日	親教	当日より、親事教会を東角井家新座敷にて執行			
	4月 10日	親教	平林寺村・岡村・合繁村	計 130人		
	4月 15日	親教	村々の親事教会講中 84 人、清河寺村講中 37 人	計 121人	岡安正能	
	4月 16日 (親教)		釣上村		占澤静(釣上村祠堂)	
	4月 25日	親教	釣上村	106人	占澤静(釣上村祠堂)	
	5月 1日	親教	釣上村			
	5月 5日 (親教)		大道村 37 人、大戸村 12 人、恩間田新田 15 人、増田新田 4 人、恩間村 25 人、大竹村 14 人、三ノ宮村 12 人	計 125人	八坂一(大道村祠堂)	
	5月 12日	親教	釣上村	20人	台治定(内台村祠堂)	
	5月 15日	親教	村々親事教会講中 118 人参拝	118人	岡安正能	
	5月 17日	親教	喜代久村	32人	台治定(内台村祠堂)	
	5月 20日 (親教)			38人		二ツ宮村配為八百吉父、兼て心願にて当家へ太々神楽奉納致度存候矣。此節柄之事ニ付、教会講中として取立、弥出来ニ今日納候由にて講中一同連立参詣ニ参り此方にて前 38 人参拝
	5月 29日	親教	親事教会講中 64 人参拝	64人		
	7月 15日	親教	親講中参拝			
	10月 2日	親教	大宮宿 5ヶ村	計 125人	石京(中川村神主)	
	11月 28日	親教	大印田村	58人		
1878 年 (明治 11 年)	5月 10日		南草加村	92人		
	5月 23日	親教	片柳村	35人	守屋吉之丞	
1879 年 (明治 12 年)	3月 20日 (親教)		大庭村	59人	守屋吉之丞	
	4月 6日 (親教)		長野村	48人	守屋吉之丞	
	4月 7日	親教	大宮宿 5ヶ町外			
	4月 14日 (親教)		本郷村		瀬田清一郎	
	5月 15日	御岳教	駒篠山講中 150 人参拝(太々神楽)・親講中も賑やか	150人	瀬田清一郎	
1880 年 (明治 13 年)	3月 15日				大村庄吉(祠堂)	砂村庄吉世話にて門人二人に相成、尤先日参り(加藤福泰・大作福三郎)但右両人之者、是迄参り候得共、猶又改テ来年三月十五日二廿之太々之心にて参詣ニ参り上り度存寄ニ候間、左様御承知被下候様願置
	4月 5日	親教				井上礼より親事教会講中参拝につき、東角井家御座敷の拝借依頼
	4月 15日	親教	下赤塚村	100人	井上礼	
	4月 30日	親教	廣在青木村始 4・5ヶ村	87人	矢作清吉	
	5月 7日		草加宿	20人		
	8月 3日	親講	親講 30 人参拝	30人	岡安石膳(正能)	
1881 年 (明治 14 年)	3月 22日		西角井止宿にて太々講中 25 人参拝	25人		
	4月 6日		神楽殿において太々講中参拝 130 人	130人		
	4月 15日	親教	親講中 28 人参拝	28人		
	4月 28日	御岳教	御岳講中 100 人程参拝	100人	杉山一信	
	5月 9日	親教	掛ヶ村	47人		
	5月 15日		宮下村より 28 人親講中	28人		

(二) 禊教を中心とした教化活動

【表③】は、先記の「日記」にみられる大宮氷川神社への教会講社の講中参詣記録である。表を見ると、神道修成派や御嶽教の講中がいくつか見られるものの、それ以外のほとんどが禊教の講中が参詣している事が分かる。禊教とは井上正鉄の創始したものであり、禊教の根本儀は「古事記」に記される伊弉諾尊の禊（身の穢を洗い清める）神事と素戔鳴尊の禊（犯した罪穢を清める）神事という心身の清浄を根拠としていた。⁽²⁸⁾

その禊教の大宮氷川神社参詣が明治七年以降に多くの数を占めるようになる要因の、一つには、「平田学系の神道家が多く、講を擁する大社の宮司などに任命されたのは、ほとんどが明治六年のことで、穴野半↓浅間神社、西川素賀雄↓出羽神社、平山省齋↓氷川神社、深見速雄↓琴平神社、落合直亮↓塩釜神社、青山景通↓大鳥神社、権田直助↓大山阿夫利神社などがその事例であ」り、そして、「活力ある講を手中にすることが、神道勢力拡大の重要な手段となった。」⁽²⁹⁾とあるように、平山省齋の大宮氷川神社の大宮司着任が大きいと考えられる。確かに、それらの人物達が神道勢力の拡大を図ったことは考えられるが、一方でその教会の拡大活動を見具体的に見てみると、単に神道勢力の拡大だけとは言い難い。次の史料より大宮氷川神社での禊教の拡大活動を見てみたい。

【史料一〇】⁽³⁰⁾

抑身禊祓の事は神代の古に起こる其事は、諸尊杖履衣帯を投棄して自ら正体に帰したまひ日向の橘の小戸の檜原に於て海水に浮き沈み身心を湯滌して汚穢迷濁を祓ひ除き本明の厳の御霊ふ帰り給ふて四柱の神あれます瀬織津比咩神・秋津比咩神・氣吹戸庄福速佐須良比咩神之を祓戸の大神と言ふ、之乃ち禊祓の根源也、其後素尊日神の御許に於て許々多久の罪事を犯し玉ふ 日神之を咎めずして天の岩戸に入玉ふ、於是乎諸神等天の安河

に相会し 素尊に千倉置度の祓具を科せ、天津児屋根命をして解除の太諄辭事を以て是を宣らしめ、其罪事を解除して是を下土に降し玉ふ、素戔鳴尊出雲の国に至て八岐大蛇を斬りて宝剑を得たり、之を日神に高天原に奉る、曰く嗚呼心茲に至て清々しと終に八雲の詠歌を発し玉ふに至る、是乃禊祓いの功効なり（中略）蓋し人の天地の間ニ生るや諸の狂事罪穢なしといふものあるとなし、況や吾においてや自ら省みるに過犯せし種々の罪事ともて量り先ずもて数ふるも、挙て尽くすへからず、故に之を唱へて数千編に至る之声音を以て我心の汚濁を祓い尽くす所謂洗心の術なり 天御中主神 高御産靈神 神御産靈神 伊弉諾尊神 天照大御神 素戔鳴尊神の神号を唱ふる所以のものは蓋人窮すときは本に帰る（中略）庶くは同志の士宜しく此意を体認して掛巻くも畏き 氷川大神天上の解除の神伝に因つて、之を拡充し推して之を他に及さは宇内広しと云トモ人物多しと云トモ数十年を出すして、皆神法の版図せんと云

明治七年十月

日本氷川神社少宮司兼 大講義穂積耕雲 謹んで識

【史料一〇】は大宮氷川神社で発行された禊教の教本の冒頭部分に掲げられたものである。そこには、禊教の根本が記載されており、素戔鳴尊の罪穢解除（禊祓）を神徳として述べ、天御中主神 高御産靈神 神御産靈神 伊弉諾尊神 天照大御神 素戔鳴尊神の神号を唱えることによって人間の中にあるあらゆる罪事を洗い流す、いわゆる浄心を目的としたものであることがわかる。ここには、教会講社を中心とした教化活動も「三条の教則」を浸透させる活動の一環であった、教化のための中心に据えられた、造化三神と天照大御神を掲げている。しかし、後方で注目したいのが、「氷川大神天上の解除の神伝」と記しており、明治元年以降、大宮氷川神社の主祭神に据えら

れた素戔鳴尊の神事・神徳を中心に述べていることである。元々禊教とは先述の様に、伊弉諾尊と素戔鳴尊の神事を根拠としていたが、この大宮氷川神社で発行された禊教会の教本には大宮氷川神社の主祭神である素戔鳴尊の神事を特化させてアピールしている事が分かる。次に禊教での実践方法についても見てみたい。

【史料一】⁽²⁸⁾

千倉置戸祓

高天原尔神留座須神魯岐神魯美乃命以天、八百万乃神等乎神集比尔、神議給比天天津祝詞乃太祝詞乎以天速素戔鳴大神尔千倉置戸乃解除乎科勢奉幾、如此科勢奉志尔、依天罪止云罪波不在止祓比給閉、清米給閉戸清々乃御心尔立婦良勢給比志事乃由乎以天、各々身中尔過犯氣牟雜々乃罪、最多計礼婆畏古久母皇大神達乃御事業尔倣比奉天天津祝詞乃太祝詞事乎以天宣礼」

実践方法については、【史料一】の祝詞を読むことが中心として掲げられているが、そこでも注目されるのが、「氷川大神天上」である素戔鳴尊にまつわる罪穢解除の祝詞を読むことが中心となっている点である。

【史料二】⁽²⁹⁾

講義 天地神人の始より説き起こして 皇統の由て起こる所に及ぶ、講畢て暫時休息教師教徒を率て神前に進む如前唱へ罷て各別席へ就いて休息す

講義 道の大原天神より出るを論して而して君臣父子の倫常に及ぶ、講畢て暫時休息す、教師教徒を率て神前

に進む前条ノ如く唱へ罷て各別席に就いて休息す

講義

三条の教憲に基づき倭漢天竺西洋其他小説新聞等を論せず、大体其人を視て法を説き信心得道の場に
至つて心魂帰着の節に安定せしめん事を要す

三日

同断 但し余日も倣之如前神号を唱える事数千度に至り、其人自然に神名の導を得て心の百念皆除き去り、至誠無為の地に至るを觀て別神殿へ招き席に就かしむ

【史料一二】は禊教会入会後に行われる講義内容について記したものであり、その講義からは「三条の教則」を浸透させるための内容となつてゐることが分かる。禊教会への入会によつて「三条の教則」に基づく講義が行われるものの、重要視すべきは教義やその実践活動が「氷川大神天上」である素戔鳴尊にまつわる内容が中心に据えられてゐるということである。

素戔鳴尊の神事を教義とする禊教会に入会・実践させるという右の実態からは、素戔鳴尊を主祭神とした大宮氷川神社を信仰させることを狙いとしていたことがうかがわれる。本節の最初でみた説教活動の減少には、大宮氷川神社での教化活動が説教活動よりも教会講社の拡大活動へとシフトチェンジしてゐたことが考えられ、その教会講社の拡大には大宮氷川神社への信仰を集めようとする目的があつたと考えられる。

四 郷村社祠官・祠掌の禊教会入会活動

(一) 禊教会講中の大宮氷川神社参詣を促す人々

【史料一三】³¹⁾

(筆者註—明治八年七月) 廿一日

葛蒲在台三ヶ村之内台村祠掌 臺治定(報告者註—参詣の世話人)

今日も八拾人程参詣ニ参り候由、当家ヲ昼食休ニ願度旨申出候間、承知之上参り尤座敷斗借ス

【史料一四】³¹⁾

(筆者註—明治九年五月) 五日

大道村祠掌八坂一事兼テ申込有之講社参詣中食並ニ御神酒等賄もらい度一同同道ニて参る

一、金五円四十銭	大道村	三十七人
一、同一円七十四銭	大戸村	十二人
一、同二円十七銭五厘	恩間木新田	十五人
一、同五十八銭	増田新田	式拾四人
一、同二円三分ト四貫四文	恩間村	二十二入
一、同二円ト三銭	大竹村	十四人
一、同一円七十五銭	三ノ宮村	十二人

本節では、大宮氷川神社への禊教会の講中の様子について見てみたい。【史料一三】【史料一四】は禊教会の講が大宮氷川神社へ参詣する際に事前申請している様子である。そこで注目されるのは、【表④】でも確認出来る様に

教導職へ任命された各村神社（郷村社に属する）の祠掌たちが講中の世話人となつて地域の人々を大宮氷川神社へ参詣をさせているということである。このことから、郷村社の祠掌達が各村において禊教会の講を結成させ、大宮氷川神社へと参拝させているという流れが見えてくる。そのような郷村社の祠掌達が各村で禊教会の講を結成させる背景を次の史料より見てみたい。

【史料一五】⁽²⁾（氷川講社規約）

氷川講社
禊事教金結社規約

第一条 信心篤志ノ輩、教余ニ入ラント欲スル者、先名簿ヲ出サシメ神前ニ誘ヒテ誓約ス、而シテ後入社スルヲ許ス

第二条 凡五拾名ヲ以テ一小社トシ、世話掛七名ヲ置、内二名ヲ拔擢シテ頭取トナシ社中ヲ督セシム

第三条 数小社ヲ合シテ一大社トシ、正副取締各一員ヲ置キ社中ヲ監セシム

第四条 天祖天神ノ大訓天津祝詞太諄辭ヲ云フ素尊垂世ノ大教禊祓ノ事ヲ云フ奉スルコト斯教余ノ緊要ナレハ受ル所ノ神符ノ旨趣ヲ常ニ服膺センコトヲ要ス

第五条 造化ノ三社 天祖皇大神 素戔鳴尊ノ神号ヲ正床ニ掲ケ朝夕神前ニ向テ天津祝詞太諄辭ノ祝詞ヲ数篇唱フヘシ

第六条 社中親睦一家ノ如ク、相互困難病厄ヲ救ヒ鰥寡孤独ヲ助ケ、専ラ協力同心ヲ主トスヘシ、若シ社中異

端邪説ヲ信シ惰慢放逸ナル者アル時ハ社中ヨリ懇切教諭ヲ加フヘシ

第七条 社中忠臣孝子貞婦義僕等アラハ取締ヘ達シ取締ヲ教長ヘ具状スヘシ

教導職期における神社の活動—大宮氷川神社と周辺神社の活動を中心に—

〔表④〕大宮氷川神社が管轄した教導職一覧

役職	郡	村	神社名	役職	名前	役職	郡	村	神社名	役職	名前
教導職	足立郡	峰村	八幡社	司宮	藤波重好	教導職試験	足立郡	宮前村	八幡神社	司掌	宮島仰之助
教導職試験	埼玉郡	埼玉村	埼玉神社	司宮	大崎茂右衛門	教導職試験	足立郡	上谷村	氷川神社	司掌	岩城秀雄
教導職	埼玉郡	寄樹村	八幡社	司掌	青木知雄	教導職試験	足立郡	桶川宿	稲荷社	司掌	桶山正吉
教導職	足立郡	草加宿	氷川社	司掌	田中吉明	教導職試験	足立郡	篠津村	多気比売神社	司掌	金田堀
教導職	足立郡	野懸村	稲荷社	司掌	金陽寺春明	教導職試験	足立郡	須賀村	氷川社	司掌	榎本恭治
教導職試験	葛飾郡	平沼村	諏訪神社	司掌	戸張真合男	教導職試験	足立郡	下石戸上村	氷川社	司掌	小口福武
教導職試験	葛飾郡	大広戸村	香取社	司掌	田中広郎	教導職試験	足立郡	小室郷本村	氷川社	司掌	菊池越雄
教導職試験	葛飾郡	古谷村	香取社	司掌	瀬沼義邦	教導職試験	足立郡	平方村	氷川社	司掌	福田良中
教導職試験	葛飾郡	谷口村	稲荷社	司掌	渡辺綱範	教導職試験	足立郡	中野村	氷川社	司掌	宮本義義
教導職試験	葛飾郡	□□村	□□神社	司掌	鈴木重栄	教導職試験	足立郡	上尾村	氷川社	司掌	今井昇
教導職試験	葛飾郡	下□□村	香取神社	司掌	渡辺元善	教導職試験	埼玉郡	鉤上村	神明社	司掌	占澤静
教導職試験	葛飾郡	下内川村	女体社	司掌	鈴木重規	教導職試験	埼玉郡	浮谷村	久伊豆神社	司掌	仙波清光
教導職試験	埼玉郡	内教村	鷲宮神社	司掌	春日郎孝純	教導職試験	足立郡	烏沼村	氷川神社	司掌	石井清常
教導職試験	埼玉郡	梅田村	女体神社	司掌	松園泰光	教導職試験	足立郡	神田村	氷川神社	司掌	神山清宗
教導職試験	埼玉郡	大田村	香取神社	司掌	八坂一	教導職試験	足立郡	本太村	氷川社	司掌	石井寛
教導職試験	葛飾郡	蓮沼村	香取神社	司掌	服部盛治	教導職試験	足立郡	鈴谷村	天満社	司掌	桶山新右衛門
教導職試験	葛飾郡	大塚村	香取神社	司掌	松本茂樹	教導職試験	足立郡	青木村	氷川社	司掌	鈴木力
教導職試験	埼玉郡	百間須賀村	身代社	司掌	加藤福光	教導職試験	足立郡	根岸村	春日社	司掌	小沢正治郎
教導職試験	葛飾郡	上高野村	八幡社	司掌	梅林寺崇明	教導職試験	足立郡	新倉村	氷川社	司掌	小山義信
教導職試験	葛飾郡	大崎村	八幡神社	司掌	藤村宗四郎	教導職試験	足立郡	内谷村	氷川社	司掌	土屋武治
教導職試験	埼玉郡	高宮村	天満社	司掌	香原信道	教導職試験	足立郡	蔵谷村	八幡社	司掌	赤尾光義
教導職試験	葛飾郡	木立村	八幡社	司掌	堀川武清	教導職試験	足立郡	本曾呂村	氷川社	司掌	石井源太
教導職試験	埼玉郡	愛倉村	鷲宮神社	司掌	石川一	教導職試験	足立郡	本郷村	氷川社	司掌	飯田正忠
教導職試験	葛飾郡	栗橋宿	八幡社	司掌	福栄行賢	教導職試験	足立郡	倉人町	氷川社	司掌	宮本瑞永
教導職試験	葛飾郡	下高野村	木々子社	司掌	東大定	教導職試験	葛飾郡	松伏村	香取社	司掌	青木文吾
教導職試験	埼玉郡	鷲宮村	鷲宮神社	司掌	大内由雄雄	教導職試験	葛飾郡	西方村	日枝社	司掌	秋山寿清
教導職試験	埼玉郡	鷲宮村	鷲宮神社	司掌	東大路義江	教導職試験	葛飾郡	清池村	近津神社	司掌	□藤清光
教導職試験	埼玉郡	葛梅村	稲荷社	司掌	相沢嘉平	教導職試験	埼玉郡	上新郷	愛宕神社	司掌	田原知雄之介
教導職試験	埼玉郡	須賀村	八幡社	司掌	飯野広義	教導職試験	足立郡	磯田村	氷川神社	司掌	河野一郎
教導職試験	埼玉郡	砂山村	愛宕社	司掌	宮崎佳	教導職試験	埼玉郡	戸ヶ崎村	袋田社	司掌	台治定
教導職試験	埼玉郡	阿左間村	八幡社	司掌	南條茂江	教導職試験	埼玉郡	大田村	久伊豆神社	司掌	玉岡福二
教導職試験	埼玉郡	大桑村	香取社	司掌	水野幸治	教導職試験	足立郡	大谷口村	氷川社	司掌	野口望樹
教導職試験	埼玉郡	加須ヶ崎村	八幡社	司掌	久勝義助	教導職試験	足立郡	柏崎村	氷川社	司掌	武笠節樹
教導職試験	埼玉郡	本川保村	長良社	司掌	小西静蔵	教導職試験	足立郡	片桐村	熊野社	司掌	内田正信
教導職試験	埼玉郡	上大越村	鷲宮神社	司掌	高津原□代 網野長雄	教導職試験	足立郡	上木崎村	高埔社	司掌	真田万
教導職試験	埼玉郡	稲子村	諏訪社	司掌	諏訪恒代	教導職試験	足立郡	小瀬村	氷川社	司掌	河原栄男
教導職試験	埼玉郡	上岩瀬村	御霊社	司掌	小松義明	教導職試験	足立郡	大門町	十二所社	司掌	熊野義正
教導職試験	埼玉郡	三田ヶ谷村	八幡社	司掌	三田宿	教導職試験	足立郡	荻間村	浅間社	司掌	酒井義孝
教導職試験	埼玉郡	行田町	八幡神社	司掌	松岡伊三郎	教導職試験	足立郡	戸塚村	氷川社	司掌	新井紋左衛門
教導職試験	埼玉郡	屈里村	久伊豆神社	司掌	中根志津真	教導職試験	埼玉郡	鷲宮村	鷲宮神社	司掌	宮内信徳
教導職試験	埼玉郡	須賀村	熊野神社	司掌	加納豊	教導職試験	足立郡	田島村	氷川社	司掌	山崎喜兵衛
教導職試験	埼玉郡	谷郷	春日神社	司掌	園田正行	教導職試験	足立郡	原馬家村	愛宕神社	司掌	千歳松彦
教導職試験	埼玉郡	上之村	上之村神社	司掌	佐伯正雄	教導職試験	足立郡	明用村	三島神社	司掌	藤原辰右衛門
教導職試験	埼玉郡	今井村	赤城神社	司掌	今井準雄	教導職試験	埼玉郡	榎後村	香取神社	司掌	石井之藏
教導職試験	埼玉郡	池上村	古官神社	司掌	茂木昇	教導職試験	足立郡	内阿弥村	平民		浅野吉之助 浅野忠三郎長男
教導職試験	埼玉郡	血尾村	久伊豆神社	司掌	青木知直	教導職試験	埼玉郡	不動岡村			伊藤静池
教導職試験	埼玉郡	河原村	河原神社	司掌	松本英之介	教導職試験	足立郡	鎌田村	氷川神社	司掌	河野浅之介 代父 河野一郎
教導職試験	埼玉郡	佐間村	天満宮社	司掌	梅村守人	教導職試験	足立郡	大間村	氷川神社	司掌	吉田政保 代父 吉田栄義
教導職試験	埼玉郡	安養寺村	八幡大神	司掌	杉山安彦	教導職試験				員	相田伊吹 氷川神社格宜 東角井福臣方 寄留
教導職試験	足立郡	大間村	氷川神社	司掌	吉田栄義	教導職試験	足立郡	小針領家村			宮本龍敬
						教導職試験	埼玉郡	古沢村	香取社	元司掌	井上賢郎

(埼玉県立文書館マイクロフィルム収蔵資料 西角井家文書5600 明治7年1月 御請帳(教導補佐)より作成)

第八条 社中ニ入ルモノ誠ノ一字ヲ以テ終身ノ神符トシ、質素節儉ヲ答トナシ人ヲ救ヲ以テ勤トナスベシ

第九条 紀元節、天長節、祈年祭、新嘗祭等ノ御祭祝日ニハ其産土神ニ参拝シ、宝祚無窮国家安寧ヲ祈ルヘシ

第十条 地方適宜ノ場所ニ金議所ヲ設ケ十月十木ノ日ニ小社中余シテ教典ヲ講明シ、或ハ小教舎施設ノ良法其他

教義ニ関スル諸事ヲ議スベシ

但臨時派出説教主亦同シ

第十二条 他ノ宗派ヲ討破シ或ハ他ノ講社ノ者ト墻闢ノ弊生セサランコトヲ要ス

第十三条 入社セシ者其寿終ニ及ヒシ時、頭取其喪ヲ弔ヒ生前授クル所ノ守札ヲ以テ本人ノ靈主ニ添テ永ク莫

祭ヲ行フヘシ

右畢

明治九年二月

官幣大社氷川神社社務所

【史料一五】は大宮氷川神社で作成された「氷川講社」の講社規約であるが、史料は印刷物であり、冒頭の規約名をみても分かる様に、元々は禊教会講社の規約として取り扱われていた。傍線部と脇書している部分が手書きとなっており、禊教会の講社名を後々には大宮氷川神社の「氷川講社」へと転じさせようとしていた事が読みとれる。⁽³⁹⁾

その条文の中では、第四条・五条において、【史料一〇】にみたような禊教会の講を結成する大宮氷川神社の主祭神である素戔鳴尊の神事に奉ずる事がここでも述べられている。その他で特に注目されるのは、第九条にある紀元節、天長節、祈年祭、新嘗祭の祭日には、各村の産土神、神社への参拝規定が設けられている事である。つま

り、この条文は各村神社と地域住民との結節を目的としていた事がわかる。

二節でも見た様に郷村社の神社は「人民ノ信仰」如何によって、神社の存在が左右される状況にあった事を考えると、各地域の神社祠掌たちが禊教会の講を各地域で結成させる事の意義は、一つに大宮氷川神社という大社に帰属する神社としてとの繋がりを持つことが出来、二つには各村の神社へ人々を集めさせることが出来るというメリットがあつたと考えられる。

また、次の第十条では、元々設けられていた各地域におけるの教典講義をする為の会議所設置項目が削除されている。これには、禊教の講義を大宮氷川神社でのみ行うことによつて、大宮氷川神社に各地域の禊教会に属する人々を集中させようとする狙いがあつたと考えられる。

このような、動向に関連して大宮氷川神社でも次の様な動きが見られる。

【史料一六】⁽³⁴⁾

(筆者註—明治八年一月) 八日 快晴

「四五日以前より御神楽殿拝見所ヲ禊講中集会ニ定候由ニて、右講中之者参詣之節ハ同所ニ於て直良会致候由ナリ」

【史料一七】⁽³⁵⁾

(筆者註—明治九年三月) 十四日

「此度潔事教会之旗^{ハタ}当家之門前より少し脇へ寄せ建候」

【史料一六】はそれまで神樂殿拝見所として利用していた場所を、禊教会の講集会所として設定しており、【史料一七】では、東角井家の門前に禊教会の旗を立てている様子がうかがえる。これらの動きからもやはり、禊教会の拡大と共に大宮氷川神社への参拝者増加を企図していたということが考えられる。

(二) 禊教会への入会促進で得た大宮氷川神社への信仰

【史料一八】⁽³⁶⁾

官幣大社氷川神社御神伝禊事教会ニ加入致シ、時々拝参仕候毎ニ、竊ニ以為御本社并御構等如何ニも狹隘ニシテ御神事御祭典ノ節、御差支之御容姿異郷社ニモ不及御体裁と奉恐察候、依之依願ハ私共教会中同志申合、教会他ノ力ヲ借ラズ、各分ニ随ひ尽力仕悉皆御造営申上度奉存候、尤官国幣社御造営御修復等総テ朝廷ニ於テ御規則も被為在候義者、兼々拝承仕居候得共、私共信徒之志願御憐察被下度御聞届相成候様ハゞ百事朝廷之御指揮ヲ伺ヒ従事仕度一同之懇願ニ御座候間、何卒願之通り御聞届相成候様其御筋へ御進達被下度、此段奉願上候也

明治九年

禊事教会惣代

埼玉県第十七区 武蔵国足立郡鴻巣駅百三十四番屋敷平民

教導職試補 島田伊左衛門(印)

同県管下第廿四区 同州同郡辻村

戸長 長澤平左右衛門長男

教導職試補 長澤源吉（印）

同県管下第十九区 同州同郡上尾村

戸長 遠山幸七長男

教導職試補 遠山忠七（印）

同県下第十七区 足立郡糠田村七十番屋敷

訓導 河野権兵衛（印）

同 同 六十八番屋敷

副戸長 長嶋清松（印）

官幣大社氷川神社大宮司県兼権大教正 平山省齋殿

同 少宮司 権少教正 穂積耕雲殿

禊教会の拡大活動がどのような結果をもたらしたのかを【史料一八】から見てみたい。この史料は、一八七六（明治九）年に禊教会員から提出された、大宮氷川神社の造営志願書である。傍線部には「私共教会中同志申合、教会他ノ力ヲ借ラズ、各分ニ随ひ尽力仕悉皆御造営申上度奉存候」と、国費によって賄われる大宮氷川神社の造営を禊教会の入会者の手によって造営希望していることがわかる。この志願書は一八八七（明治一〇）年三月に、平山大宮司より埼玉県令へと提出され、その文中にも「本社信仰禊事教会之者共申合、悉皆御再建仕差上度旨出願仕候（中略）尤願人共申合即今金一万円備置候得共、尚不足之分ハ同志申談調金仕（中略）一切官費ヲ不奉仰」と、禊教会が「本社信仰」と大宮氷川神社を信仰する教会であることが記され、また造営費として「金一万円」を準備し

ていることが分かる。その後、同月二日には埼玉県令より内務省へと提出されるが、内務省からの返答には「人民限り造営之儀ハ難及詮議、尤再建ノ為メ崇敬上ヨリ寄附献金ノ筋ヲ以願出候ハゞ、其県見込相添更ニ可伺出⁽³⁸⁾」と、禊教会員による造営は認められず、その後再度の申請が一八八〇（明治一三）年に提出され、大宮氷川神社の造営が国費によって決定するといった経過をたどる。

このような、禊教会員からの志願書の提出は、大宮氷川神社自体を信仰しているからこそその動きであり、素戔鳴尊の神事にもとづく禊教会へ入会させたことが大宮氷川神社への信仰として結びついた結果であると考えられる。

以上のような大宮氷川神社と周辺神社の活動が、一八七九（明治十二）年、平山省齋による大成教会設立（禊事教会はその傘下に属することになる）に結実することになる。同年に平山省齋によって設立された大成教会に関するものとしては、次の表を見てみたい。

【表⑤】は、大成教会の創立委員として大宮氷川神社の旧神主である西角井の名前が含まれている。更に大成教会には禊教がその一部に属していたことから、それまで禊教会員として大宮氷川神社に参拝を促した祠官・祠掌達も大成教会に入会している事が確認できる。⁽⁴⁰⁾

このような動きからも、禊教を含む大成教会といった教会講社の更なる拡大を企図していたことが読み取ることができ、地域の人々の信仰を大宮氷川神社へとより一層集約させようとした狙いがあったと考えられる。

しかしながらこのような活動も、政府の政教分離政策を採る政府によって、一八八二（明治一五）年には官国幣社の神官教導職廃止、一八八四（明治一七）年には府県社以下神社神官教導職廃止が発せられ、神社における教会講社の活動は行うことが出来なくなる。では、その後の神社の動きはどの様であったのかについて簡単に触れておきたい。

【表⑤】大成教会創立会員一覧

	大教正	平山省齋
	樞大教正	本居豊顕
	中教正	諏訪忠誠
	正四位	戸田忠至
	従四位	水野忠精
	正六位	桜井能監
華族	中教正従五位	土屋寅直
	中教正従五位	永井尚服
	少教正従四位	井上正直
	少教正従五位	板倉松叟
華族	樞大講義	東宮千別
	中講義	村越鉄善
	中講義	熊谷東洲
	少講義	黒川常德
	樞少講義	川尻義裕
	訓導	横尾信守
	訓導	三谷謙翁
埼玉県有志総代	大講義	亀掛川政隆
	樞大講義	西角井正一
	少教正従五位	大給近悦
	少教正従五位	細川利永
	樞少教正従五位	松平頼位
	樞少教正従五位	牧野忠泰
	少教正	磯部最信
	少教正	秋山光條
	樞少教正	穂積耕雲
	正七位	八木彫
	正七位	尾越蕃輔
	二等属	中村秋香
	四等属	宇都野正武
	七等属	野沢俊元
群馬県有志総代	樞大講義	斎藤多須久
	少講義	湯沢義路
	樞少講義	阿久津盛為
神奈川県	少講義	小川実
新潟県有志総代	大講義	重野七郎
	大講義	山田方雄
	少講義	花井豊臣
	樞少講義	藤井重容
	訓導	三浦恭満

(埼玉県立文書館マイクロフィルム収蔵史料 西角井家文書 5427 (年代不詳) 「本教大成教会創立会員」より作成)

【史料一九】

皇大神宮大麻頒布之儀ハ、素ヨリ深ク注意ヲ尽シ、其拝受者ヲシテ真ニ信仰ノ念ヲ振起セシメ、毫モ不都合不
体裁無之様保護致スヘキハ無論之儀ニ候処、猶今般改正ニ際シ一層御配念可有之、此段予テ申進置候也

明治十六年一月

粕壁宿 松園恭光殿外御中

埼玉県下 大麻頒布事務所

教導職活動の停止後における大宮氷川神社と周辺神社の活動は、皇太神宮大麻の配札活動が中心となり、埼玉県下の大麻頒布事務所は西角井家内に設置される⁴²。その大麻頒布活動は、「史料一九」傍線部のような神社への信仰を振起させるものとしての活動であり、教導職期と同様に大宮氷川神社と郷村社の祠官・祠掌達との連関した活動であったことが伺える⁴³。これは、教導職期の大社と郷村社の連関した活動がその後活かされていることを示しているように。

おわりに

最後に、本稿で検討してきた神社の動向についてまとめておきたい。教導職期における大宮氷川神社と周辺神社の活動については、その教化活動である、説教活動と教会講社の活動とを比較した場合、教会講社（禊教会講中の結成）を介した教化活動に力点が置かれていた。また、地域の人々を禊教会に参加させることは「三条の教則」に基づく講義による教化活動である一方で、一義的には、教本に見られた教義内容や実践方法から大宮氷川神社や周辺神社への信仰を振起させるためのものであったとみる。そのような活動の背景には、明治初年の神社制度による、大宮氷川神社への説教参加者数から推察しうる信仰の減少や、それ以下の郷村社の存在自体が「人民ノ信仰」如何で左右される状況におかれていたことが挙げられる。それゆえに、まず大宮氷川神社と周辺神社の神職たちは、「仲間一統」となって郷村社の維持・運営方法を協議するとともに、大宮氷川神社と郷村社との連関した組織的な活動基盤を設けるにいたる。

そのような連関した動きは、教導職期の活動にも発揮され、禊教会の入会促進には、大宮氷川神社だけでなく、

郷村社の祠掌たちによる禊教の結成・拡大が行われた。郷村社の祠掌達が積極的に活動した要因には、禊教の講を結成させることで地域の人々を郷村社へ集めさせようとする狙いがあった。それは、郷村社の維持・運営の助成に繋がり、それゆえに郷村社の祠掌達は積極的に禊教の拡大活動に動いたのだと考えられる。教導職期の活動は、教会講社を介した国民教化活動であり、神道界の勢力拡大と評価されているが、その活動を具体的に見てみると、教会講社を拡大させる意味には、国民教化とともにまずは神社と地域の人々とを結びつけるといった存続にからむ現実的な課題への対応がその目的としてあったと考えられる。その拡大活動の結果として、神道界の勢力拡大へと結実してゆくのである。

よって教導職期における大宮氷川神社と周辺神社の活動は、大社から郷村社が組織的に連関し、教化活動を通じて神社を存続させていくためのものであったことを指摘したい。⁽⁴⁾

註

- (1) 安丸良夫(『文明化の経験—近代転換期の日本』二〇〇七年 岩波書店 二二七頁)。その他にも、中島三千男氏は、『大教宣布運動の進展、教会講社の活動の進展は、必ずしも政府や復古神道のイデオログが意図した教化政策の貫徹を意味するものではなかった。(中略) 当の国学者・神官にあっては財源的にも、また組織の獲得という点からも、教会・講社の結果を図っていた。』とし、教導職期の神社の活動が国民教化の過程ではなく、自己の勢力拡大過程であったことを明らかにしている(『大教宣布運動と祭神論争—国家神道体制の確立と近代天皇制国家の支配イデオロギー—』『日本史研究』第一二六号 五一頁)。神社の教導職活動の過程を追った研究には、説教活動を追った藤井貞文「静岡・浜松県下における教導職の活動(上)」(『神道学』第七五号)、同氏「静岡・浜松両県下における教導職の活動(下)」(『神道学』第七六号)や、出雲大社の動向を追った同氏「島根県下に於ける教導職の活動」(『神道学』第一二二号)「島根県下に於ける教導職の活動続」(『神道学』第百十二号)など

が挙げられる。

- (2) 阪本是九「国家神道形成過程の研究」(一九九四年 岩波書店)、他にも、神社新報政教研究室「増補改訂 近代神社神道史」(一九九一年 神社新報社)など。

- (3) 森悟郎(ハ久伊豆神社小教院叢七)言説・儀礼・参詣―ハ場VとハいとなみVの神道研究―(弘文堂二〇〇九年二四一頁)

- (4) 近世期の大宮氷川神社研究に関しては、輟矢嘉史氏が神職の身分意識を検討した「近世神主と幕府権威―寺社奉行所席次向上活動を例に」(歴史学研究八〇三号 一―一六頁)や、「幕末維新期における神主の「支配」認識―「寺社奉行直支配」意識に着目して―」(早稲田大学大学院文学研究科紀要 四九輯四一―五二頁)、「近世神主の江戸城年頭独令―大宮氷川神社・府中六所宮を事例に―」などが挙げられる。

- (5) 『大宮市史』 第三卷中二四―四九頁。

- (6) 『大宮市史』 第三卷中四五頁。

- (7) 埼玉県立文書館マイクロフィルム収蔵資料 西角井家文書 九八六六 元治元年七月 御家名(「永統講積」)金規定御連名帳。

- (8) 近代以降の氷川神社研究は神仏分離期における氷川神社の動向を検討した、井上麻衣子氏「神社における神仏分離―武蔵国一ノ宮大宮氷川神社を事例に―」のみである(『史艸』四八号 四七―六九頁)。

- (9) 「年中諸用日記」 明治四年三月一日(『大宮市史 資料編』三二七―三頁)。

- (10) 「年中諸用日記」 明治五年六月一日(『大宮市史 資料編』三六五―〇頁)。

- (11) 「年中諸用日記」 明治六年三月十五日(『大宮市史 資料編』三四三―九頁)。

- (12) 大宮氷川神社では、近世期まで三神主家で年番制で取り仕切っていた神主職に祭礼や神社の運営権があった。その神主に代わる大宮司が精選補任された人物にが就いた事による影響は、少なからず考えられる。ただしそのみにおいて神社への参加者・参詣者の減少の要因づける事は出来ない。近世期と明治期においての祭礼の変化や、神社内部の変動への旧神主家の動向などを追う必要もあるが今後の課題としたい。

- (13) 明治四年五月一日 太政官布告。

- (14) 明治六年五月一日 太政官布告 第61号。

- (15) この当時の官国幣社以下府県郷社の官費廃止について、阪本氏は(筆者註―明治)四年五月の「神社改正規則」にいう国幣社

とは、府藩県制度の存続を前提とした上で、その府藩県（特に藩）の責任によって主に経済的に維持さるべき神社のことであつた。（中略）だが、これは国家の財政事情からいっても、また廃藩による神社の維持主体の変化からいっても到底大蔵省の容認できるものではなかつた」として廃止に至る経緯を述べている（坂本氏前掲著 七三頁）。

(16) 明治五年二月二五日 太政官布告 第五八号。

(17) 明治六年二月二日 太政官布告 第六七号。

(18) もっとも、府県神社官についても明治六年七月三十一日達によつて「月給ヲ廃シ自今郷村社同様人民ノ信仰帰依ニ任セ給フ致サル可シ」と府県神社官の給与も官費支給が廃止される。

(19) 埼玉県立文書館マイクロフィルム収蔵資料 西角井家文書一三二一（明治六年）（徴兵調・社務所分課外綴）。

(20) 註8前掲井上氏論稿では、神仏分離期においても大宮氷川神社が各地神社の取調掛になつていたことや、各神社への神拝式授与など地域神社の指導的存在であつたとされる。

(21) 近世期には幕臣で外国奉行なども勤めた人物。明治期に入ると神道への転身を図り、明治十二年には各地に点在する宗教の禊教・淘宮教・天学教・連門教・御岳教などをまとめて、教派神道の一派である大成教を創始する。（井上順孝『教派神道の形成』弘文堂一九九一年）また、井上氏は平山省齋の氷川神社大宮司着任に関し、「この年（明治六年）報告者註」には鴻雪爪が琴平神社祠官となり、宍野半は浅間神社宮司になるなど有力な神道家達が各地の神社に配置されている。これをもつて、大教院の経済的基盤をしっかりとしようとする意図があつた。」としている（井上前掲書三二七頁）。

(22) 『大宮市史』 第三巻 中 資料解説 一九頁。

(23) 『大宮市史』 第三巻 中 資料解説 二二頁～二二頁。資料解説においても氷川神社に禊教が参拝した事実が触れられているが、ここではその意味について言及していくものとする。

(24) 東宮千別は、天保一一年に井上正鉄が創始した禊教の弟子。井上正鉄の死去後、同弟子であつた坂田鉄安と別れ、東宮は禊教吐善加美講と名称を変え継ぎ、明治一二年には、平山省齋の創始した大成教に所属する事となる。一方、坂田鉄安は惟神教会禊教と名称を変え継いでいく事となる（井上前掲書）。

(25) 田中義能『神道十三派の研究』下巻（昭和六二年第一書房）。

(26) 前掲安丸氏著 五三三頁。

(27) 埼玉県立文書館マイクロフィルム収蔵資料 東角井家文書 一六六八明治七年一〇月「禊事神伝式」。

(28) 註27に同じ。

(29) 註27に同じ。

(30) 「年中諸用日記」明治八年七月二一日（「大宮市史資料編」三六〇五頁）。

(31) 「年中諸用日記」明治九年五月五日（「大宮市史資料編」三六〇五頁）。

(32) 埼玉県立文書館マイクロフィルム収蔵資料 西角井家文書 一四一五 明治九年二月「氷川講社規約」。

(33) 実際に、「禊教会結社規約」が「氷川講社結成規約」としてその後利用されていたかについては、現在のところ不明であるが、

禊教会の講中を大宮氷川神社の講中として、転じ設けようとしていた大宮氷川神社側の意図はくみ取る事が出来る。

(34) 「年中諸用日記」明治八年一月八日（「大宮市史資料編」三五七五頁）。

(35) 「年中諸用日記」明治九年三月一四日（「大宮市史資料編」三六三〇頁）。

(36) 埼玉県立文書館所蔵行政文書 明三七 社寺戸籍部 明治一〇年「氷川神社再建ノ件内務卿へ内申」。

(37) 註36に同じ。

(38) 註36に同じ。

(39) 埼玉県立文書館所蔵行政文書 明三七 社寺戸籍部 明治一三年 七〇「氷川神社社殿造営ノ件宮内卿へ進達」。

(40) 埼玉県立文書館マイクロフィルム収蔵史料 西角井家文書 五六六四 明治一三年「大成教会教費録」や同家文書 五四三八 明治一四年「二〇年「大成教会加入願」など。

(41) 埼玉県立文書館マイクロフィルム収蔵資料 西角井家文書 八五一五 明治一五年一〇月一七七年二月（皇大神宮大麻頒布関係書類）。

(42) 註41に同じ。

(43) 註41に同じ。他にも埼玉県立文書館マイクロフィルム収蔵資料 西角井家文書 八四六九 明治一七年「神宮大麻頒布員」など。

(44) 近年では国家神道の確立として、畔上直樹氏が『村の鎮守』と戦前日本―「国家神道」の地域社会史―（二〇〇九年 有志舎）において、大正期における村の鎮守の活性化に伴い、神社と地域が密接になっていく姿を描かれている。大正期にそのような活動が可能となる前提として、今回検討した様な明治期の活動の意義があると考えられる。